慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	詩と映像と音響の融合 : 表象として（その2）：日本フランス語フランス文学会発表報告
Sub Title	Exposé de la Société japonaise de la langue et de la littérature française : fusion de poème, d'image et de musique : comme représentation (2)
Author	小潟, 昭夫(Ogata, Akio)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.45 (2007. 9) ,p.21- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070930-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本フランス語フランス文学会発表報告

詩と映像と音響の融合

――表象として（その 2）

小　潟　昭　夫

出会い

2005 年 3 月 17 日、前々日パリ第Ⅲ大学での「魔神」の発表で脱力感と安堵感を抱きながら、私は日本人のアーティストを訪ねてみようと、画廊に向かった。与座さんという、モンマルトルのテルトル広場で出会った画家が、個展を開いていたからだ。しかしながら、その日は画廊で絵は拝見できたものの、彼に会うことは出来なかった。パリスコップを見ていたら、目に入ったのが、「蝋燭の灯りでのピアノリサイタル Remi Masunaga」という文字だった。カルム通りの古い教会、聖エフレム教会でショパンを中心に演奏が行われるという。ジュッシューからソルボンヌへぶらぶらと写真を撮りながら散策気分で聖エフレム教会に着くと、内部からリハーサル中のピアノの音が漏れ聞こえてきた。リハの邪魔をしてはならぬと思い、パンテオンの方向へ散策に出た。スポーツバーでは、例年のように 6 ヵ国対抗のラグビー試合の中継をやっていて、あたりは喧騒に包まれていた。聖エフレム教会は、静寂そのものだった。三列目の中央通路側の椅子に座ったが、ピアノが目の前にあり、純白のドレスをまとった可愛らしい大和撫子が登場した。ショパンの「葬送行進曲」で前半が終わり、後半は、モーツアルトにはじまり、ショパンの「ノクターン第 20 番ハ短調　遺作」そして最後に「アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ」をエネルギッシュに弾き、拍手喝采とブラヴォーの嵐のなか最高潮で終わった。小柄な、svelte な体躯といっていい日本女性の身体から発せられる力強いピアノ音に魅せられた私は、なぜか誇らしい気持ちになっていた。ＣＤを求めて、振り返ると、着替えを終えて

帰り支度の増永玲未さんがいた。私は今の感動を率直に伝え、写真を撮らせていただいた。フランス人の友人の方に、二人並んだところを撮っていただき、パリ大学で「魔神」という映像と音楽の融合作品を二日前に発表してきたばかりで、偶然に今日の演奏会に立ち寄ったことを告げた。日本人の聴衆もいらしてくれてありがたいと言っていた。どんなペースでお仕事をなさっているのですか？という問いに、「ぼちぼちやっています」という言葉が耳に残った。

1.「映画と音楽」コンサートへ

1－1　アイデアの誕生

帰りの飛行機の中で私は増永玲未さんのピアノ演奏を反芻しながら、「映像と音楽の融合」プロジェクトを考えていた。6 月の下旬に日本に一時帰国し、演奏会を行う予定があると言っていた。そこで、夏休みに慶應義塾大学で演奏をしていただき、映像と音楽の融合ライブをやっていただく、といった夢のようなアイディアが飛行中に浮かんでいた。ショパンといえば、ロマン・ポランスキー監督の『戦場のピアニスト』で演奏された「ノクターン第 20 番ハ短調遺作」が思い出される。玲未さんの演奏もこの映画を意識したプログラムだったと思われた。さらに私の脳裏を掠めてきたのは、ショパンの「ワルツ　ロ短調作品 69－2」で、マルグリット・デュラス原作『ラマン／愛人』で主人公の少女がサイゴンを離れた船上で流れてきたこの曲に泣き崩れたシーンであった。また、中原俊監督（吉田秋生原作）『櫻の園』のテーマ曲がショパンの「前奏曲」の 7 番目の曲で、テレビのコマーシャルでもお馴染みの曲である。「前奏曲」といえば、2 番目の曲が、イングマール・ベルイマン監督、イングリッド・バーグマン主演の『秋のソナタ』で、ピアニストの母親が娘にレッスンを行うシーンがある。この時点で、「映画と音楽」というテーマで、慶應義塾大学通信教育部の夏期スクーリングでコンサートが開催できると、確信した。

1－2　アイディアの具体化

他方、増永玲未のＣＤ、「クロード・ドビュッシー」がフランスのスティル社から 2003 年にリリースされており、私は演奏終了後に買い求めていた。アール・ヌーボー調のデザインが施された素敵なジャケットを見ながら、全部で 19 曲が納められている。

Deux Arabesques (1888–1891), Rêveries (1890), Danse (1890), Pagodes *Extrait d'Estampes* (1903), Reflets dans l'eau, Hommage à Rameau, Mouvement, Images 1 (1904–1905), Golliwog's Cake-Walk extrait de *Children's Corner* (1906–1908), Voiles, Les sons et les parfuns tournent dans l'air du soir, Ce qu'a vu le vent d'Ouest, La Danse de Puck *Extraits de Préludes 1* (1909–1910), Pour les cinq doigts, Pour les tierces, Pour les quartes, Pour les degrés chromatiques, Pour les notes répétées, Pour les arpèges composés *Extraits de Douze Etudes Livres I & II*(1915)

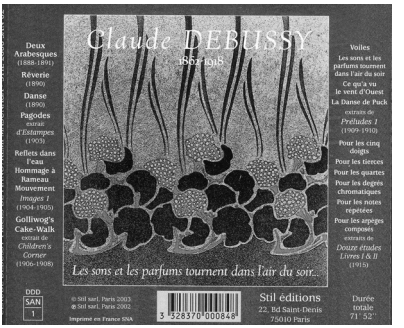

図 1　Claude DEBUSSY Remi MASUNAGA Piano STIL

クロード・ドビュッシーについて、私の印象に残っている曲は管弦楽曲「牧神の午後への前奏曲」であったので、ピアノ曲はどれもこれも新鮮な響きで耳に残った。私は、増永玲未さんとのメールのやり取りの結果、以下のようなプログラムを提案した。

「映画と音楽」増永玲未ピアノコンサート・プロジェクト

第一部

1）ピーター・ブルック『雨のしのび逢い』（1960）
Anton Diabeli Moderato Cantabile
ソナチネ 168 の 1 番 1 楽章 、ソナチネ 168 の 4 番 2 楽章

2）ベルイマン『秋のソナタ』（1997）
Chopin：Prélude　No2……2：20

3）中原俊『櫻の園』（1991）
Chopin：Prélude Andantino……0：42

4）原作デュラス『ラマン・愛人』（1991）
Chopin:Waltz in B minor. Op.69, no.2 4：30

第二部

5）クロード・ドビュッシー「前奏曲集 1」より
Claude Debussy: Préludes 1 (1909−1910)
音と香りは夕べの大気に漂う
Les sons et les parfums tournent dans l’air du soie……3:07
西風が見たもの
Ce qu’a vu le vent d’Ouest……3:11
パックの踊り
La Danse de Pack……2:33

6）フィリップ・グラス
Philip Glass : Dreaming Awake, The Hours

7）メシアン：ダイシャクシギ（鳥のカタログより）
Messiaen: Le Courlis cendré *extrait du catalogue d’oiseaux*
映像：Jean=Yves Cousseau

第三部

8）ルイ・マル『鬼火』（1963）

Erik Satie:Gymnopédie……4 :00

9）岩井俊二『リリィ・シュシュのすべて』（2001）

Debussy :Prélude 1 Arabesques……3:44

10）ロマン・ポランスキー『戦場のピアニスト』（2002）

Ballade. No. 1 in G minor. op. 23 …… 9：11

Nocturne in C# minor, posthumous…… 4:07

Grande Polonaise brillante. op. 22 Allegro Molto…… 13:22

演奏時間を無視した提案であったので、いくつか刈り込むことになるが、おおむね案は出来上がった。問題は、第二部の〈映像と音楽の融合〉で、増永玲未さんは、映像作家ジャン＝イヴ・クソー氏とのコラボレーションによるオリヴィエ・メシアン作曲「ダイシャクシギ」を用意してくれた。私は、ドビュッシーの「前奏曲」からの3曲に映像作品を創ることになった。「音と香りは夕べの大気に漂う」は、ボードレール『悪の華』の詩篇にインスピレーションを受けて、ドビュッシーが作曲したものである。花の色と香り、大気の透明感、不思議な拍子の楽曲、ボードレールの人生、彼をめぐる三人の女性、黒人女性ジャンヌ・デュヴァル、女優マリー・ドーブラン、貴婦人サバチエ夫人、教会などが、私の脳裏を掠めた。で、映像採集のために、私が向かったのは、近くの公園、智光山であり、サレジオ教会であり、横浜の山手教会であった。ドビュッシーの楽曲に映像を貼り付けることの困難さを感じつつ、毎日曜日ビデオカメラを携えて走り回った。「西風が見たもの」は、激しい風に揺れる樹木や花、そして急流や滝、はげしい雷など、雨嵐の日、風の強い日に撮影した素材をもとにした。また、「パックの踊り」に関しては、この曲の持つユーモアに着目し、映像的には反転した世界を表現してみた。これら3曲の映像制作は、8月22日のコンサートの前日まで行った。

1－3　ピアニスト紹介

増永玲未さんは、武蔵野市民会館小ホールで敬愛するフランス作曲家たちにささげるコンサートを行うが、私にとって衝撃的だったのは、ピアニストがいきなりマイクを手にしてこれから弾くであろう楽曲について解説したことだった。宇都宮高等学校時代、オーケストラ部に属していたが、栃木県内の中学校へ演奏旅行したことがあった。生徒たちにトロンボーンやオーボエやホルンを壇上で掲げて音色を聞かせながら、楽器の解説をして、それからシューベルトの「未完成交響曲」やシベリウスの交響詩「フィンランディア」を演奏したことが思い出された。増永玲未さんのスピーチは、短いながら極めて的確にフランス音楽の真髄を伝えていた。とりわけ、オリビエ・メシアンの「ダイシャクシギ」（鳥のカタログより）の、様々な鳥を表象する楽章を、ピアノを弾きながら、解説してくれたときには、溜飲を飲む思いだった。メシアンという現代の作曲家の作品を、ここまで噛み砕いて解説してくれて、聴けるとは、なんと自由な発想だろうかと思い、慶應義塾大学でのコンサートにもこの方式を取り入れようと心に決めた。映像とトークを交えたピアノ・リサイタル、面白いではないか。

ここで、ピアニスト増永玲未について、紹介しておきたい。

> Remi Masunaga est née le 25 janvier 1975 à Tokyo. Pour ses quatre ans, elle reçoit de ses parents un piano droit. Cet instrument marque le début de sa carrière de pianiste, qui va la conduire de l’Ecole de Yamaha au Kunitachi College of Music qu’elle fréquentera de 1984 à 1994.
>
> En 1994, elle part pour la France et entre au Conservatoire National de Région de Marseille dans la classe de Jacques Rouvier. L’année suivante, elle est admise au Conservatoire National Supérieur de Musique de Paris dans la classe de Théodore Paraskivesco et Laurent Cabasso. Elle remporte, en 1999, le Diplôme de formation supérieure de piano du CNSM et, en 2000, celui de formation supérieure de musique de chambre.

Par deux fois également, en 1999 et en 2002, elle gagne le Diplôme du Concours international Mozart de Salzbourg, alors qu'en l'année 2000 elle avait déjà obtenu la Mention du jury au Concours international Olivier Messiaen, à Paris. C'est en 2001 qu'elle reçoit le Prix de la meilleure interprétation de musique contemporaine, lors du Concours international Halina Czerny-Stefanska et qu'elle enregistre aussi, pour les Editions Stil, un programme Cassadó avec le violoncelliste Pablo de Naverán. Elle remporte en l'année 2002 le Diplôme d'honneur au Concours Maria Canals, à Barcelone. Aujourd'hui, Remi Masunaga mène une carrière de concertiste, soliste et chambriste, tout en bénéficiant des conseils de personnalités telles que György Sándor, Wladimir Krajnew et Ramzi Yassa.
Depuis 1996, elle joue en duo avec le violoncelliste Pablo de Naverán et se produit tant en France qu'à l'étranger.

1975 年東京生まれ。4 才よりヤマハ音楽教育システムにてピアノ、音楽全般の勉強を始める。国立音楽大学付属小学校、中学校、音楽高等学校を経て国立音楽大学に入学。1994 年、フランスに渡りマルセイユ国立音楽院ピアノ科に入学、1995 年、パリ国立音楽院（CNSM）ピアノ科に入学、1998 年、同音楽院室内楽科卒、現在、同音楽院和声科に在籍中。

1999 年、モーツアルト国際音楽コンクール（ザルツブルグ）にてディプロマ賞受賞。2000 年、パリ市メシアン国際コンクールにて審査員賞受賞。2001 年、パリーナチエルニーステファンスカ国際コンクールにて最優秀現代音楽演奏者賞受賞。2002 年にモーツアルト国際音楽コンクール（ザルツブルグ）にて再度ディプロマ賞受賞。2002 年、マリアカナルス国際コンクールにて名誉ディプロマ賞受賞。

今までに、賀集裕子、ジャック・ルヴィエ、テオドール・パラスキヴェスコ、ローラン・ガバッソ、ジェルジ・シャンドール、ヴラディミル・クライネフ、ラムジ・ヤッサの各氏に師事。1996 年よりパブロ・デ・ナヴェランとデュオで演奏活動開始。2002 年、STIL 社よりガスパール・カサドのＣＤを

リリース。現在、ソリスト、室内楽奏者としてヨーロッパ各地にて演奏活動を行っている。

以上は、STIL社からリリースされたClaude DEBUSSY Remi MASUNAGA PianoというＣＤのジャケットに記されている。

1－4　ピアニストへのインタヴュー

私は、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎のイベントテラスで、8月12日に、当時法学部の4年生だった光安真紀子君（現一橋大学大学院生2年）にお願いして、ピアニスト増永玲未へのインタヴューを行ってもらった。上記の経歴を増永玲未さん自身の肉声で語るという貴重な企画であった。4歳のときに音楽全般の教育を受けたこと、フランス音楽に目覚めたきっかけが合唱で参加したフォーレの「レクイエム」に感動したこと、日本とフランス音楽教育の違いはあるのか、フランスやヨーロッパで演奏活動する場としての気軽に聞けるクラシック環境、コンサートホール、町の公民館の小劇場、ストリートミュージシャンでのクラシック、パリのメトロでのヴィヴァルディー「四季」の演奏、観客と演奏者との触れ合いを大事にすること、なぜ説明をすることになったかの経緯はコンサート後の質問をよく受けるので予め前もって説明するほうが効果的なため、聴衆と音楽を共有したい、音楽に一緒に入りたいという思い、メシアンの音楽技法、弾いていて心地いい作曲家メシアンやモーツアルト、新しい風を吹きこんだ音楽界の革命児ドビュッシー、弾いていて心地のいい作曲家ドビュッシー、準備期間に文献を調べたり、同じ年代の他の曲を聴いてみたりして曲をイメージする、ボードレールの「音と香りは夕べの大気に漂う」を弾くときにドビュッシーの歌曲を聴いてみること、ジャン＝イヴ・クソーの映像を見てより音楽の解釈を広げられること、映像と音楽の融合体験、日本人としてのアイデンティティ、日本文化の素晴らしさ、メシアンの日本好き、情報に恵まれているグローバル化時代の音楽の素晴らしさ、与えられたものを150パーセント、200パーセントを発揮するように心がけていること、カンボジアで学校をつくるチャリティー

コンサート、音楽による社会貢献、メシアンにとっての色の付いた作曲家モーツアルト、花をテーマにしたピアノ曲、鐘の好きなフランス人、STIL 社長のＣＤジャケット作成のプロセスにおけるサプライズ、雪達磨式に与えられる課題曲、身体知としてのバレー音楽、ローザンヌ国際バレー・コンクールでの作曲体験など、広範囲にわたる楽しいインタビューだった。言葉の端端に彼女の人生観、つまり生き方が垣間見られた。

1－5　通信教育部夏期スクーリングフランス語キャンペーンに向けて

2005 年 8 月 22 日 17 時 30 分、慶應義塾大学通信教育部主催、慶應義塾大学表象文化論研究会共催、フランス語キャンペーン映画上映会「映画と音楽」Le cinéma et la musique が、夏期スクーリングの課外催し物として三田キャンパス北館ホールで開催された。

今年の夏期スクーリングは、パリ在住のピアニスト増永玲未さんを迎えて、映画におけるクラシック音楽、とりわけピアノ曲について、実際に聴いていただきながら考えていきたいと思います。ロマン・ポランスキー監督の『戦場のピアニスト』で弾かれるショパンのノクターンに思わず胸がキュンとしてしまいますが、映画の中でショパンが果たす役割というより、あの音がもたらす感動を体感してみませんか？　ピアノレッスンにまつわる様々な経験が映画化されたデュラスやベルイマンの作品に共感を持たない人はいないでしょう。

また映像と音楽の融合というテーマで、私たちはリュミエール兄弟の無声映画に音楽を付けるといった試みを行ってきましたが、今回は増永玲未さんが敬愛するフランスの作曲家ドビュッシーやメシアンの曲に映像を付けるという実験的な試みを行います。

第 1 部では、ピーター・ブルック監督マルグリット・デュラス脚本『雨のしのび逢い』〔1960〕では、工場長夫人（ジャンヌ・モロー）が息子をピアノレッスンに通わせるシーンで、ディアベリ「ソナチネ 168 の 1 番 1 楽章」をゆっくりと歌うようにと、先生が注意しますが、そのとき突然女の人の叫び

声が聞こえます。ベルイマン『秋のソナタ』〔1997〕では、世界中を演奏旅行で飛び回っている母（バーグマン）にコンプレックスを感じている娘が、母の目の前で是非聞いてほしいとショパン「前奏曲　2番」を弾きますが、母は諭すように弾き始めます。そのときの娘の心中が顔の表情で推し量ることが出来ますが……。フランスの植民地ヴェトナムで、15歳半で32歳の中国人青年と愛人関係をもった「私」が、彼と別れてフランスに向かう船の中で耳にしたショパン「ワルツ」に思わずうめくように泣き崩れたあのマルグリット・デュラスの『ラマン／愛人』〔ジャン＝ジャック・アノー監督、1991〕のように、映画の中でピアノ曲がほとんど象徴的に心情を表象しているようにおもわれます。

第2部では、〈音楽と映像の融合〉という実験的試みを、クロード・ドビュッシー「前奏曲集1」より、3曲 IV. 音と香りが夕べの大気に漂う　VII. 西風が見たもの　XI. パックの踊り，に映像を付けさせていただきます。またメシアン「ダイシャクシギ〔鳥のカタログより〕」にフランス人映像作家ジャン＝イヴ・クソーの映像を流します。

第3部では、再び映画と音楽のテーマで、岩井俊二監督『リリィ・シュシュのすべて』〔2001〕が使用したドビュッシー「アラベスク」を、そして最後にロマン・ポランスキー『戦場のピアニスト』〔2002〕で使われたショパンの「ノクターン第20番嬰ハ短調〔遺作〕」と「アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ変ホ長調作品22」を弾いていただきます。

1－6　映像と音楽についての解説

「映画と音楽」第1部は、ピーター・ブルック監督（マルグリット・デュラス原作）『雨のしのび逢い』Moderato Cantabile 1960で始まった。男の子がピアノレッスンを受けるときの曲で、作曲はアントニオ・ディアベリで、ソナチネ168 Antonio Diabeli Sonatine 168である。ディアベリは、1781年に生まれ、1858年に亡くなったオーストリアの作曲家で、音楽出版者でもあった。ハイドンの弟子で友人であった。ウィーンに定住し、音楽教授と作曲に従事していた。のちに楽譜出版社を創立し、ベートーヴェン、チェルニ

ー、シューベルトなどの作品を出版した。芸術的というよりは教育的で通俗的なピアノ曲、歌曲、舞曲を多く作曲したが、有名になったきっかけは、ベートーヴェンが彼の円舞曲を主題として、「ディアベリ変奏曲」（1823）を作曲したことによる。

図２　『秋のソナタ』より

２番目の曲は、イングマール・ベルイマンの『秋のソナタ』1997で、イングリッド・バーグマンが最晩年に演じた世界中を駆け巡るピアニストとコンプレックスの塊の娘をめぐる心理的なほつれをテーマにしたもの。母の前でレッスンを受ける曲はショパンの「前奏曲２番イ短調」Frédéric Chopin :Prélude No.2 である。最初の３小節はホ短調、それからト長調に変わり、次にロ短調へと暗い色調となり、またニ長調になる。映画の中の親子関係のやるせなさにマッチしているように思われると、増永玲未さんは解釈している。心の微妙なゆれが長調と短調の移行で示しているというのである。ここで、ショパンについて、彼の母はポーランド人で、彼の父親がフランス人であることを指摘され、そのことを、私も、きっと聴衆も気づかされたと思われる。

３番目は、ジャン＝ジャック・アノー監督（マルグリット・デュラス原作）『ラマン／愛人』1991 で、ショパンの「ワルツ　ロ短調作品 69－2」Frédéric Chopin :Waltz in B minor op. 69－2 である。フレーズが終わることなく、繰り返される、混沌としたもの悲しさが表わされている。『ラマン／愛人』の最後の盛り上がりのシーンに音楽は流れる。

図３　『ラマン／愛人』より

「また別のとき、それも同じこの航海の途中、同じ大海原を渡っているあいだ、同じくひとの寝静まる夜がすでにはじまっていた、中央甲板の大サロンで、突如、ショパンのワルツが鳴りひびいた、彼女がひそかに、しかも懐かしさとともに知っていたワルツだった、というわけは、何ヶ月のあいだその曲を習おうと試みたのだが、どうしても正確に弾けるようになれず、どうしてもだめだったので母は彼女がピアノを断念するのに同意してくれたという曲だったのである。その夜、いくたびもの夜また夜のなかに熔けこみ見失われてしまった夜なのだが、そう、娘はこのことを確信している、娘は、その夜をまさしくこの船の上で過ごしたのだった、そして、あの事件が起こったとき、星のきらめく空の下でショパンの音楽が突然鳴りひびいたとき、娘はこの船の上にいたのだった。そよとの風もなく、音楽は暗い客船内のいたるところにひろがっていた、何かしらに関する天からの厳命のように、内容の知れぬ神の命令のように。そして娘は、まるで自分も自殺しようとしているかのように、自分も海に身を投げようとしているかのように、すっくと立った、それから彼女は泣いた、あのショロンの男のことを想ったからだった、そして彼女は突然、自分があの男を愛していなかったということに確信をもてなくなった、――愛していたのだが彼女には見えなかった愛、水が砂に吸いこまれて消えてしまうように、その愛が物語のなかに吸いこまれて消えていたからだ、そして今ようやく、彼女はその愛を見出したのだった、はるばると海を横切るように音楽の投げかけられたこの瞬間に。」（マルグリッド・デュラス著、清水徹訳『愛人／ラマン』（河出書房新社、1985）185 から 186 ページ）

上記 3 映画の内容に密接に結びついている音楽で、ピアニストの増永玲未は、演奏会の前に映画を見ていたので、彼女なりの解釈を加えて弾かれていた。

ここで、増永玲未さんがドビュッシーについて解説した。印象派の画家たちが活躍した時代の作曲家で、印象派の音楽家とも言われているが、とりわけ音楽界では異端児あるいは革命児とみなされていたこと、従来の音楽の規

則を全てやめてみる、東洋音楽（黒鍵だけの音楽）へ傾倒する等を指摘されていた。

第 2 部は、〈映像と音楽の融合〉の実験的な試みとして、クロード・ドビュッシーの「前奏曲」より、「音と香りは夕暮れの大気に漂う」Les sons et les parfums tournent dans l’air du soir に映像をつけることにした。この曲は、シャルル・ボードレール『悪の華』の「夕べの諧調」よりインスピレーションを受けてドビュッシーが作曲した曲である。

Harmonie du soir

Voici venir les temps où vibrant sur sa tige
Chaque fleur s’évapore ainsi qu’un encensoir;
Les sons et les parfums tournent dans l’air du soir;
Valse mélancolique et langoureux vertige!

Chaque fleur s’évapore ainsi qu’un encensoir;
Le violon frémit comme un cœur qu’on afflige;
Valse mélancolique et langoureux vertige!
Le ciel est triste et beau comme un grand reposoir.

Le violon frémit comme un cœur qu’on afflige,
Un cœur tendre, qui hait le néant vaste et noir!
Le ciel est triste et beau comme un grand reposoir.
Le soleil s’est noyé dans son sang qui se fige.

Un cœur tendre, qui hait le néant vaste et noir!
Du passé lumineux recueille tout vestige!

Le soleil s’est noyé dans son sang qui se fige...
Ton souvenir en moi luit comme un ostensoir!

Baudelaire: *Les Fleurs du mal, XLVII Harmonie du soir*

数ある翻訳の中から上田敏『海潮音』の訳を取り上げてみる。

薄暮《暮れ方》の曲《きよく》　　シャルル・ボドレエル

時こそ今は水枝《みづえ》さす、こぬれに花の顫《ふる》ふころ。
花は薫じて追風に、不断の香の炉に似たり。
匂も音も夕空に、とうとうたらり、とうたらり、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦《う》みたる眩暈《くるめき》よ。

花は薫じて追風に、不断の香の炉に似たり。
痍《きず》に悩める胸もどき、ヴィオロン楽《がく》の清掻《すががき》や、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈《くるめき》よ、
神輿《みこし》の台をさながらの雲悲みて艶《えん》だちぬ。

痍《きず》に悩める胸もどき、ヴィオロン楽《がく》の清掻《すががき》や、
闇の涅槃《ねはん》に、痛ましく悩まされたる優心《やさごころ》。
神輿《みこし》の台をさながらの雲悲みて艶《えん》だちぬ、
日や落入りて溺《おぼ》るゝは、凝《こご》るゆふべの血潮雲《ちしほぐも》。

闇の涅槃《ねはん》に、痛ましく悩まされたる優心《やさごころ》、
光の過去のあとかたを尋《と》めて集むる憐れさよ。
日や落入りて溺るゝは、凝《こご》るゆふべの血潮雲、
君が名残《なごり》のたゞ在るは、ひかり輝く聖体盒《せいたいごう》。

上田敏は、「音と香りが夕べの大気に漂う」を、「匂も音も夕空に、とうとうたらり、とうたらり」という風に、音の繰り返しによって、tourner という言葉を表現している。視覚的なイメージではなく、聴覚的なイメージで訳した、すなわち意味内容（signifié）ではなく、音響形態（signifiant）に注視した上田敏の詩人としての感性を讃えたい。他方、ドビュッシーは、漂う感覚を、4 分の 3 と 4 分の 2 に分けて、いわゆる、4 分の 5 のリズムにするという離れ業を行っている。不確定なリズムを使って、ワルツのようなリズムから、マーチのようなリズムに変化しているわけは、風によってすーっと揺れ動く香りの移動感覚を表現しているのではないかと増永玲未は解釈している。

どんな映像をつけるか、かなり悩ましい想いで、取り掛かった。最初に浮かんだのは、花の映像の採集であった。白百合や真っ赤な薔薇の花を撮り、それらを『悪の華』という書割に収めるために、智光山公園に出向き、カトリック教会である、中目黒のサレジオ教会や二子玉川のサレジオ教会さらには横浜の山手教会に出向いた。しかしなかなか私が求める垂直的なイメージや時代色を獲得することは出来なかった。ボードレールの鋭い眼差しを写し取ったナダールのポートレイト、3 人の女性のイメージ（貴婦人サバチエ夫人、黒人女性ジャンヌ・デュヴァル、女優マリー・ドーブラン）、そしてマ

図 4-6　左からサバチエ夫人、ジャンヌ・デュヴァル、マリー・ドーブラン

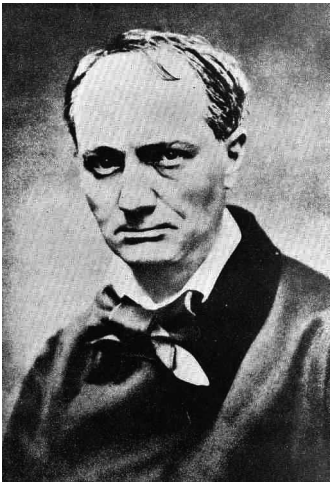

図７　シャルル・ボードレール

リア像を提示した。山手教会のマリア像を夕方から夜になって月が出てくるまでカメラを撮り続けていた。日本で実写の映像をつくることの困難さを覚えながら、とにかくボードレールの詩句をテロップで流した。この詩が持つ自然、教会、音楽そしてボードレールの人生を総合的にヴィジュアル化したのが、私の映像作品であった。

次の「西風が見たもの」は、極めて明快なイメージが浮かぶ曲であった。ヨーロッパにおける西風のイメージは、凶暴なもの、激しいものを意味するということから、私は、嵐の日や豪雨の日、さらには強風で樹木が激しく揺れ動いている日に、カメラを回すことに心がけた。ドビュッシーが織り成す楽曲の、激しいリズムに沿って、収集した映像をモンタージュした。さらに水の中を登っていく鯉の勢いのある泳ぎを追い、水から空へ飛翔する鯉のぼりへとイメージが跳躍するモンタージュを行った。最後に、めくるめくはげしいリズムの末の雷のイメージで、突然終わる。楽曲の途中に穏やかな優しいフレーズを、赤紫の花で表象させた。

三番目の「パックの踊り」は、シェイクスピア『真夏の世の夢』に出てく

図８「映画と音楽」ライブ演奏より

る妖精パックをイメージした楽曲である。私は、この曲が持つ諧謔性、ユーモアに着眼し、これを映像でどう表現するか、この一点に絞って映像を収集してみた。冒頭の、水に浮かぶ逆さの花の揺らめきからはじまり、鴨の家族的な姿、子猿が親の蚤を取っている逆転した光景、おそらく餌を捕獲したり探しているときに、頭を水の中に潜りこませ、逆立ちをするような格好になるときの、ユーモラスな鴨の姿を踊りとして表現した。

次は、フィリップ・グラスの Dreaming Awake と The Hours の一部を弾いたが、これは〈映像と音楽の融合〉作品の元祖というべき「コヤニスカッツィ」の作曲家フィリップ・グラスの楽譜を手に入れた増永玲未さんの好意によって実現したものである。夢見る覚醒を、フィリップ・グラスは、次のように言っている。

> Après avoir complété la composition, il me vient à l'esprit que la musique a semblé évoquer un sens spécial (ou un état d'âme) que beaucoup de nous avaient épreuvé dans le passage 'crépusculaire' juste avant de nous endormir. A ce moment-là, devons-nous être alertes à noter, nous trouvons nous-même incertains : ou bien nous rêvons en nous réveillant ou bien nous nous réveillons en rêvant. D'où vient le nom : Rêve réveillé. La musique consiste à un double cycle d'idée musicale qui en principe peut être répété sans fin.

> 作曲が完成したあと、私の心に浮かんだことは、音楽は、私たちの多くが寝入る前に〈朦朧とした〉移ろいのなかで感じた特別な感覚（あるいは魂の状態）を喚起するように思われた。そのとき、私たちは注意深く言わなければならないが、私たち自身が不確かだと思う。私たちは目覚めながら夢見るのか、夢見ながら目覚めるのか、そこから次のような名前が生じる。覚醒する夢。音楽は、原則として絶えず繰り返されうる音楽思想の二重の循環にあるのだ。

私たちは、ここでミニマルミュージックを耳にすることができた。現代の

バッハのような、宗教的ですらあるグラスの音楽の深みに引き込まれていくような感覚を持ったのは、私だけであろうか？

第2部の最後は、オリヴィエ・メシアンの「ダイシャクシギ」（鳥のカタログより）を、ジャン＝イヴ・クソーの映像を見ながら、増永玲未さんのピアノ演奏を聴いた。彼女はたまたま南仏のフェスティヴァルで、この曲のテーマであるダイシャクシギが生息しているフィニステール県ウエサン島出身のジャン＝イヴ・クソー氏と出会い、この鳥の映像があるというので、コラボレーションしようということになったという。鳥の音楽である。メシアンは、音楽家であると同時に鳥類学者でもあった。朝早く起きて、五線紙とカセットテープとカフェオレを携えて、鳥の声を採集に出かけるという。そしてこの曲で使われた断章を、様々な鳥の鳴き声として、増永玲未さんは弾いてくれた。

現代音楽というより自然の中の音楽に包まれた感じを抱いたのだった。

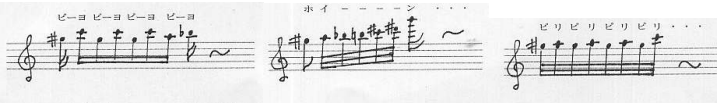

図9　Olivier Messiaen オリヴィエ・メシアン　*Le Courlis cendré*「ダイシャクシギ」

図10 「ダイシャクシギ」演奏と映像

鳥の歌の動因は、メシアンに言わせると、4つある。1つ目は、枝や食べ物が得られる地域の所有権を確保するために歌う。2つ目は、性愛の衝動で、鳥が愛の季節である春にとりわけ歌うのはそのためである。3つ目は、何の目的も社会的な機能ももたない歌で、生まれてくる光と消えてゆく光に誘発される。4つ目は、歌というよりは、「叫び」というもので、明確な意味をもった叫びで出来た会話を行う。愛への叫び、食料への叫び、警報の叫びなどで、社会的なコミュニケーションの手段としての叫びである。(「オリヴィエ・メシアンその音楽的宇宙」より)

第3部は、岩井俊二監督『リリィ・シュシュのすべて』(2001)で、メインテーマとして繰り返し流れてくるドビュッシーの「アラベスク1」の演奏で始まった。この「アラベスク」という曲は、ドビュッシーのなかでは極めてロマンティックな初期作品ということになる。日本では、14歳の中学生が小学生の首を切断した衝撃的な事件があり、少年の心の闇とは何かと、震撼させられたのである。この映画は、そうした時代背景のなかで、中学生の原風景的な映像を提供した。放課後、「アラベスク」をピアノで弾くマドンナ、ＣＤを万引きしてしまう主人公の中学生……。

そして最後に、ロマン・ポランスキー監督『戦場のピアニスト』(2002)より、2曲を続けて演奏した。ショパン「ノクターン　嬰ホ短調　遺作」と「アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ　変ホ長調　作品22番」。映画『戦場のピアニスト』の冒頭では、1939年、ワルシャワにあるラジオ局のスタジオで、ウワディスワフ・シュピルマンがショパンの遺作である「ノクターン第二十番嬰ハ短調」を演奏中、突如、近くに爆弾が落ち、立て続けに二発落ちた。エンジニアは撤退を促すが、シュピルマンは首を振って頑なにピアノを弾き続ける。が、大音響とともに壁が崩れ、彼の顔に落ちてきた。「アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ」は、この映画のラストシーンで、コンサート・ホールのソワレで、オーケストラをバックにシュピルマンが素晴らしい音色を奏でながら弾く曲である。私たちのコンサートでの増永玲未さんの演奏がピークに達した時だった。拍手喝采の内に終わったのだが、あまりに演奏が素晴らしかったので、アンコールはやめ

図 11　『戦場のピアニスト』より

図 12　『戦場のピアニスト』より

にして、この曲を胸に響かせながら、幕を引いたのである。玲未さん、ありがとう。

夏期スクーリングでの「映画と音楽」コンサートは、こうして大成功のうちに終わった。主催の慶應義塾大学通信教育部のスタッフの皆さん、さらには経済学部研究プロジェクトの学生である貝沼舞さん、ヒヨシエイジの代表で自由研究セミナーの元学生の堀太誌君、同じくヒヨシエイジ企画代表法学部の学生の光安真紀子さん、フランス語クラスの生徒だった扇信嗣君には開場の設定や撮影やポスターデザインや開場受付などを手伝っていただいた。

1－7　アンケートの結果

アンケートの回答をたくさんいただいたが、ここでは代表的なものを列挙しておきたい。

・今回の演奏の中ではドビュッシーとメシアンの演奏に強い印象を受けました。切れ味の鋭い演奏でした。映像との共演ではドビュッシーの「パックの踊り」がうまくあっていたように思います。（60 代、男性、慶應義塾外国語学校生、タイ語）

・ピアノの音と映像はとても感動的です。美しさに感極まって涙が出てしまいました。
・Dreaming Awake の演奏が素敵でした。映画にとってピアノ曲の占める比重の大きさを感じました。今回の実験は、逆に、音楽に映像をつけるということで、独創的なのだろう。（40 台、男性、通信生）
・今まで何気なく聴いていた映画音楽でしたが、選曲には色々と思いが込められていることや、作曲家の表現したい工夫などが、増永玲未さんの簡潔でやさしい語りのおかげでよくわかりました。とてもいい企画だと思いますし、素晴らしいピアニストを呼んでくださって感激です。容姿から想像しうる通りのやさしく美しいピアノの音色、こんなに素敵なピアニストがそれも日本人であり、フランスでご活躍されているなんて、とっても嬉しく思います、これからも美しいピアニストでいらしてください。応援しています。（30 代、女性、塾員）
・音楽がメインで映像がサブというのは普段あまりとりあげられていないと思うので新鮮でした。ヨガをやっていると日常の生活では聞こえてこない自然の音が聞けてリラックスできるのですが、今回のイベントもまさに同じ効果があるなーと思いました。日々家事や勉強に追われ時間がすぐに過ぎてしまいますが、今日のような非日常、とても有意義な空間でした。……フランスに住みその土地の空気を吸っている方の演奏だなと感じました。繊細ながらも存在感のあるところが、最後のショパンはとてもステキでした、これからもステキな演奏を！（30 代、女性、塾生）
・映画と音楽の相乗効果を改めて認識いたしました。これからの作品鑑賞の心構えが違ってくると思います。（60 代、男性、塾員）
・ピアニストの増永玲未さん自身のコメント付きで演奏が進行していくところが斬新だったと思います。今回のイベントで、映画に対する見方が少し変わりました。音楽って映画の中では重要なんですね。（40 代、女性、塾生）
・ドビュッシー、フィリップ・グラスといった新しいタイプのクラッシック音楽に触れることが出来てよかったです。『戦場のピアニスト』のエンディ

ングのピアノ演奏が印象的で今回のイベントに興味を持ってきてみたのですが、生で聴けて、映画とはまた違ったよさを感じました。（20 代、女性、塾生）

・普段は映像に合わせて音楽が流れているものですが、生演奏の音楽に合わせて抽象的な映像で楽しむのもなかなかよいものだと思いました。（20 代、男性、通信生）

・第 2 部のフィリップ・グラス Dreaming Awake はとても深くひきこまれる感じでした。日常見ている風景にも音楽を吹き込むことで、何か訴えるものになったと感じました。音楽の内容 1 つ 1 つについての説明は、なるほどと思うものばかりでした。これからも自然体でがんばってください。（30 代、女性、塾生）

・音のない映像は想像を膨らますかもしれないが、いかに無味乾燥なものか、ということがよくわかる。関係ないが、私は『冬のソナタ』の魅力を聴かれたら、必ず後ろに流れる音楽を一番にあげる。あの音たちがどれだけ私の涙を吸い上げたかわからない。「映像と音楽」の結びつきに改めて感心した次第である。（50 代、女性、塾生）

・「映像と音楽」が一緒になって、風や水や雷と一致してよかったです。メシアンも説明によりより身近に感じました、ソロは特に素晴らしかったです。（60 代、女性、塾生）

・企画がとてもよかったと思います。私もピアノを弾くのですが、色々と説明してくださり理解が深まりました。映画、映像との融合は、ピアノをより fantastic な感じで聴けたと思います。ピアノ曲の説明もとてもわかりやすく上手に話されました。とても頭のいい方だと思います。演奏はもちろん素晴らしいです。京都でコンサートを！！！（女性、塾生）

・ピアノが揺れるほどの迫力があり感動いたしました。（50 代、女性、塾生）

・映像にもう少し工夫がほしかった。映像のために音楽が引き立つか（または逆）……そのような構成だとよかったかなあと思いました。メシアンがよかった。（50 代、女性、塾生）

・二つのデュラスの映画音楽、よかったです。素晴らしい演奏。ベルイマン

の「秋のソナタ」のショパンでは、増永さんのご説通り、母と娘／芸術と凡人の葛藤を再認識しました。ドビュッシーの映像、面白かったです。西風って誤解していました。確かギリシア神話では優しいかぜと。（60 代、女性）

2.「春の音連れ――表象として　フランス流花鳥風月」に向けて

2－1　コンセプトとプログラミングへ

夏が終わり秋になるとすぐに私は、フランスにおける自然を作曲家たちはどのように表現しているのかと思い、とりわけ日本の花鳥風月という独特の言い回しに従って、花のピアノ曲はあるのか、増永玲未さんに尋ねたところ、―― 8 月のインタヴューのときは、フォーレの歌曲「花と蝶」は思い浮かぶが、パリに帰って調べてくるとのことだった――、早速、コンセルヴァトワールの教授連に訊いて下さって、モーリス・ラヴェル「高貴にして感傷的なワルツ」の副題が、〈アデライドもしくは花言葉〉であるという回答をいただいた。

秋学期に来年度の新入生歓迎行事について周到な準備をしていた。無論、増永玲未さんも、私の意向には賛成してくれていた。そのころ読んだ本『フジ子ヘミングの「魂のことば」』のなかに、「私は音楽評論家のためにピアノを弾いているのではない。ファンとして集まってくれる小さな人々のために曲を選び、そして弾いている。間違っても音楽大学の教授なんかが選びそうな曲は、プログラムには組まない。」（103 ページ）とか「クラシックのコンサートで疑問に思うのは、なぜ演奏者は、誰も知らないような曲ばかり選ぶのか。結局、自信がないんじゃないかと疑いたくなる。それを聴いたって、なんの感動もない。つまんない曲をずっと聴かされたら、誰だって居眠りをするし、嫌になっちゃう。世間は正直よ。そんな小手先でちょろまかせるものではない。」（105 ページ）が眼に入ったので、増永玲未さんにこんなことを言っているピアニストがいますよ、とメールしたら、「パリではそんなことを言っていたら、もうその次からオファーが来なくなってしまいます。常

に新しいことに挑戦していなければピアニストはやっていられません」というような返事だった。生ぬるい微温的な環境で、有名人の言葉に動かされてメールしてしまった自分の甘さを恥じ入った。増永玲未さんは、プログラム作成には実に念入りに行うピアニストなのだ。

2－2　プログラム作成のプロセス

プログラムは、時間があるならば、ゆっくり決めるのが一番だと玲未さんは言う。彼女が一番時間をかけるのはプログラム決めで、いろいろなアイデアから、取ったり捨てたり、と言う作業を幾度となく繰り返すのが、音楽家の仕事のひとつでもあるので、今のところは、アイデアを出しあうと言う事にして、本格的には、全体の構想が決まってからにしたい意向であった。ピアニストとしての彼女の体力や集中力も、もちろん考慮しなければならない。もし話（トーク）を入れるのであれば、通常とはまた違ったプログラミングの可能性も出てくるので、聴衆の集中力も考えなければならない。プラスで、有名な曲も入れるとなると、その線で、他の曲との兼ね合いも考えなければならない。調性、拍子、曲の持つ性格、時代 etc, あらゆることに気を配らなければならないので、推敲の余地はあると思う。プログラムの最終期限まで考えたいと玲未さんは言ってきた。

この間、私がやっていたことは、フランソワ・クープランの花や鳥のチェンバロ曲、ドビュッシーの「前奏曲」、ラヴェルのピアノ曲すべて、メシアンの曲などをＬＰレコードやＣＤで聞いたり、クープラン、ドビュッシー、ラヴェル、メシアンに関する書物を読みあさったり、江戸時代の「花鳥画」についての研究書を読んだり、ドビュッシーとカミーユ・クローデルの関係を伝記で調べたり、ヴァットーの「シテール島の船出」をめぐる詩や散文とりわけネルヴァルの『東方紀行』やボードレール『悪の華』やユゴー『静観詩集』を読み、アンゲロプロスの映画『シテール島の船出』を見たりしていた。増永玲未さんはピアニストとしての観点でコンサートを企画してしまうクセがあるので、企画者としての私の希望をかなえるには、どのようにしていくかを、話し合いで解決したいという。ピアニストとしてのアイディアで、

役に立ちたい、そのためには、このコンサートの方向性を理解しておかなければならないので、彼女なりの思ったことや疑問点を質したいといい、1. このコンサートのコンセプトとしては花鳥風月、その他鐘、地水、火風など自然に関わるフランスの作曲家の音楽でまとめると理解してよいか？（あるいは花鳥風月と言うのは、日本的な言葉であるが、これをフランスでどのように受け止められているか、フランスでも通じる情緒であるか、音楽を通じて探るコンセプト、と理解してよいのか？）2. 映像は、今回つけるのか？

3. Le Courlis cendré を J.-Y. Cousseau 作品と一緒に、演奏するのか？　4. 全体で何分の予定か？　通常コンサートなら、45 分～ 50 分、を一部に、30 分～ 35 分を 2 部に、というのが、演奏者にとっても聴衆にとっても、いいバランスといわれている。もしくは、休憩なしでは、演奏者の体力、集中力、一番いいものを出すのに 1 時間が限度だと思う。6. もし、プログラム的なもの、例えば、「話 10 分、映像 10 分してから、ピアノ 30 分、休憩、映像流しながらピアノ 10 分……」とか構想があるなら、知らせて欲しい。

全体の構想がわかると、ここではこれぐらいの長さのこのような叙情的な、あるいは躍動的な曲をバランスを見ながら曲順を考えたり、分数によって曲の選択が出来る。この分数は、あくまで、音楽家の視点で語るのであれば、一見些細な事に思えて、後々まで頭を悩まさせられるもので、一番重要なことである。音楽的に、コンサートひとつをまとめ上げるのに、最大ポイントとなる。なぜなら、それによって、コンサートの構成が決まってくるためである。ピアノを弾くだけということで時間を計算すると、今の時点で、純粋に弾くだけで、48 分、出入りを考えて 50 分とみなした方がいいと思う。というわけで、次のような提案を増永玲未さんからいただいた。

Couperin

le Carillon de Cythère	3’
Le Rossignol-en-amour	3’
Les lys naissants	3’

Ravel

Valses nobles et sentimentales　15’
　extraits de Miroirs
Alborada del gracioso　7’
Oiseaux tristes　4’
　Messiaen
Le Courlis cendre　8’
　Debussy
quelques pieces（野を渡る風が 2’、西風が 3’30 位）

8. 花鳥風月、ということで、月も付け加える予定があるのか？　フランスにこだわらなければ、ベートーヴェンのソナタがあるし、そうでなければ、ドビュッシーの月の光 4’、前奏曲集より月光の降り注ぐ露台 4 ～ 5’ がある。

2－3 「オンディーヌ」と「ダイシャクシギ」の朗読

モーリス・ラヴェルに関しては、サンソン・フランソワのＣＤを聴いて、印象的だった「道化師の朝の歌」と「悲しい鳥たち」を提案したが、思いつきに過ぎなかった。玲未さんが、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ「月光」とドビュッシーの「月の光」を提案してくれて私はうれしくなった。というのは、月を表象するドイツの曲とフランスの曲が対比的に聞くことが出来るからだ。さらに、アロイジウス・ベルトランの詩集『夜のガスパール』から「オンディーヌ」の訳詩を読み、原典に当たったところ、今回のテーマに極めてふさわしい花鳥風月それに水が加えられた詩であった。また私はそのころ読んでいたジャンケレヴィッチの『ドビュッシー』や『ラヴェル』に影響されていた。教室でピアノを弾きながら哲学の講義をしていたこの哲学者は、彼らの自然を表象するピアノ音楽を見事に哲学的に解読していた。

Ondine

... Je croyais entendre
Une vague harmonie enchanter mon sommeil,
Et près de moi s'épandre un murmure pareil
Aux chants entrecoupés d'une voix triste et tendre.
Ch. Brugnot. — *Les deux Génies*.

« Ecoute ! - Ecoute ! - C'est moi, c'est Ondine qui frôle de ces gouttes d'eau les losanges sonores de ta fenêtre illuminée par les mornes rayons de la lune; et voici, en robe de moire, la dame châtelaine qui contemple à son balcon la belle nuit étoilée et le beau lac endormi.

» Chaque flot est un ondin qui nage dans le courant, chaque courant est un sentier qui serpente vers mon palais, et mon palais est bâti fluide, au fond du lac, dans le triangle du feu, de la terre et de l'air.

» Ecoute ! - Ecoute ! — Mon père bat l'eau coassante d'une branche d'aulne verte, et mes sueurs caressent de leurs bras d'écume les fraîches îles d'herbes, de nénuphars et de glaïeuls, ou se moquent du saule caduc et barbu qui pêche à la ligne !

*

Sa chanson murmurée, elle me supplia de recevoir son anneau à mon doigt pour être l'époux d'une Ondine, et de visiter avec elle son palais pour être le roi des lacs.

Et comme je lui répondais que j'aimais une mortelle, boudeuse et dépitée, elle pleura quelques larmes, poussa un éclat de rire, et s'évanouit en giboulées qui ruisselèrent blanches le long de mes vitraux bleus.

オンディーヌ

……わたしは、茫漠とした調べが私の眠気を誘い、耳元で、悲しげで優しい声が途切れ途切れにうたう歌に似た囁きが注がれているのを聞いているようだった。

シャルル・ブリュノ「二つの精髄」

「聞いて！　聞いて！　私よ、オンディーヌよ、陰鬱な月の光に照らされて響きの良い菱形のあなたの窓辺をこんな水の雫でそっと触れているのは。波のもようのドレスを着て、バルコニーから美しい星の夜空と美しい眠れる湖をじっと見つめている女城主がここにありよ。」

「波という波は流れの中で泳ぐ水の精なの、流れという流れは私の宮殿に向かって蛇行する小道なの。私の宮殿は、湖の底に、火と大地と大気がつくる三角形の中で、流れのまにまに建てられているの。」

「聞いて！　聞いて！――私の父はざわざわと音を立てる水を緑の榛の木の枝で叩きつけ、私の姉たちは泡立つ腕で雑草と睡蓮とグラジオラスが繁茂する瑞々しい小島を愛撫するか、釣り糸をたらす老衰した髭面の柳を小ばかにするの。」

*

彼女は歌をささやくと、私に、オンディーヌの夫になるよう指に指環を嵌め、そして一緒に宮殿を訪れ湖の王様になってくださいと懇願した。

私は彼女に人間の女が好きだと答えたので、仏頂面になって悔しい思いを胸に、涙に暮れたが、ふいにけたたましく笑い出すと、私の青いガラス窓に沿って白々と流れ出す激しい雨となって消え去った。

フランスの自然を表象するすべてが脈打っているうえに、ブラックユーモアが感じられる美しいポエムに、モーリス・ラヴェルは終始ピアニッシモで進行し、最後のクライマックスでフォルテッシモで終わるという見事な曲作りを行った。増永玲未さんも、よく考えた末にオンディーヌを選択した。
水の反映より詩がある分今回のコンセプトにはより近いと思うという。芸術を総合理解するのに、よりよい選択であり、さまざまな element がでてくるのも魅力的なことである。花鳥風月の集大成と言っても過言ではないか？
そして増永玲未さんは、ご自分が武蔵野市民文化会館で行ったように、フランス人に詩を読んでもらい、プログラムに訳を載せてはどうかと提案してこられた。もちろん私はこの提案に大賛成である。

また玲未さんの師であるジャック・ルヴィエ氏の “petit scherzo chinois”（中国風小スケルツオ）をプログラムの中に入れてみたいと提案してきた。

というように、12 月から 3 月までに、次第に内容がにつまってきたのだった。そこで、アロイジウス・ベルトラン『夜のガスパール』（1829）より「オンディーヌ」とオリヴィエ・メシアン「ダイシャクシギ」の朗読を、慶應義塾大学商学部非常勤講師のエマニュエル・ボダンさんに、お願いすることにし、快諾を得た。

XIII. LE COURLIS CENDRE
(numenius arquala)

L’Ile d’Ouessant (Enez Eusa), dans le Finistère, à la pointe de Pern, on peut voir un grand Oiseau, au plumage rayé, tacheté de roux jaunâtre, de gris et de brun, haut sur pattes, pourvu d’un très long bec recourbé en forme de faucille ou de yatagan : le Courlis cendré ! Voici son solo : trémolos lents et tristes, montées chromatiques, trilles sauvages, et un appel en glissando tragiquement répété qui exprime toute la désolation des paysages marins. A la pointe de Fonteno-Velen, hachés par le bruit des vagues, tous les cris des oiseaux de

rivage : appel cruel de la Mouette rieuse, rythmes cuivrés (à sonorités de cor) du Goéland argenté, mélodie flûtée du Chevalier Gambette, notes répétées du Tourneplerre à collier, sifflements stridents, roulement aigus de l'Huîtrier pie et d'autres cris encore ;ceux du petit Gravelot, du Goéland cendré, du Guillemot de Troîl, de la Sterne naine et de la Sterne Caugek. L'eau s'étend, à perte de vue. Peu à peu, le brouillard et la nuit se répandent sur la mer. Tout est noir et terrible. Au milieu de ces rohers déchiquetés, le Phare du Créach fait entendre un mugissement puissant et lugubre :c'est la sirène d'alarme ! Encore quelques cris d'oiseaux..., et la plainte du Courlis cendré qui se répète et s'éloigne...Froid, nuit totale, bruit du ressac ...

十三　ダイシャクシギ
（ヌメニウス・アルクワタ）

フィニステール県のウエサン島（エネズ・ウサ）のペルン岬に立てば、黄色味がかった褐色と灰色と茶色のまだらで、縞模様の羽毛でおおわれた、足が長く、鎌もしくはヤタガンの形をした、先が曲がった極めて長い嘴の大きな鳥が見える。ダイシャクシギだ！　そのソロ演奏が聞こえる。ゆっくりと悲しげなトレモロ、上昇する半階音、野性的なトリル、そして荒涼とした海景を表現する、悲劇的に繰り返されるグリサンドの叫び。

ファンタンヴェラン岬に立てば、潮騒で途切れ途切れに聞こえる海岸の鳥たちの全ての叫び声だ。陽気なカモメの獰猛な訴え、セグロカモメの甲高い（ラッパの響きの）リズム音、アカアシシギのフルートのようなメロディー、キョウジョシギの繰り返される音、金切り声の数々、ミヤコドリの鋭いルルマン、さらに他の叫び声。コチドリや灰色カモメやウミガラスやコアジサシやサンドイッチアジサシの鳴き声。

見渡す限り、海水は広がる。少しずつ、霧と夜が海面を覆う。一面暗く恐ろしい。切り立つ岩の真ん中に、クレアックの灯台が強く悲痛な轟音を聞かせる。警報だ！

　さらに鳥たちの鳴き声、そしてダイシャクシギの嘆き節が繰り返され、遠ざかる……ルサックの寒さ、完全な夜、砕ける波の音……

図 13　ダイシャクシギ

ブルターニュ地方の突端の海に飛び交うダイシャクシギの鳴き声が耳に聴こえるような文章だ。

私は、2006 年 9 月にブルターニュ地方へ撮影旅行をしてきた。サンマロの城壁に止まっていたダイシャクシギを目の当たりにして感動を覚え、さらにトレブルデンではその鳴き声を実際に耳にすることが出来た。荒涼とした海景に飛び交うダイシャクシギや他の鳥たちを眺めながら、2005 年の夏と 2006 年の春に玲未さんが弾いてくれたオリヴィエ・メシアンの「ダイシャクシギ」を演奏とエマニュエル・ボダンさんの朗読を思い出していた。

風は、ドビュッシーの「西風が見たもの」を演奏していただいた。映像は、2005 年版を基にしてさらに桜の花が突風に揺さぶられる映像を加えたが、シンクロするときの技術的な失敗があり、あとで、ヴィジュアルバンドの完全版をオーディオバンドに貼り付けることになった。この曲は、映像と音楽の融合というテーマには格好の音楽だと思えた。

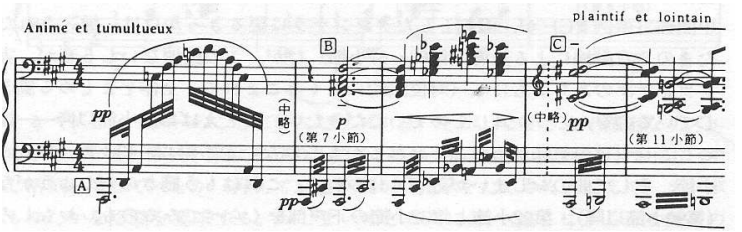

図 14　クロード・ドビュッシー *Ce qu'a vu le vent d'ouest*
前奏曲集第 1 巻 「西風が見たもの」

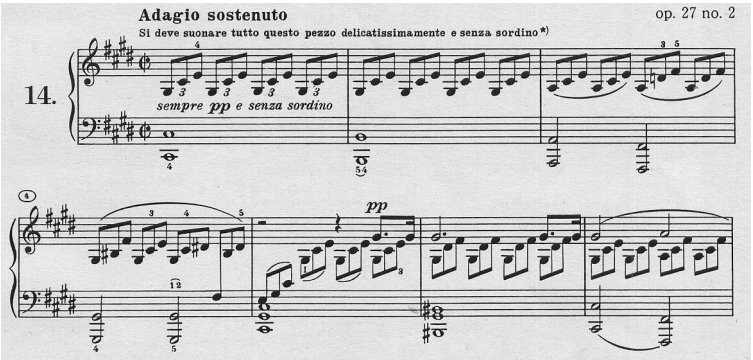

図 15　Beethoven　ベートーヴェン Sonate pour piano, en do dièse op.27n 2, ‘*Clair de Lune*’ ピアノ・ソナタ　第 14 番　嬰ハ短調　「月光」第 1 楽章

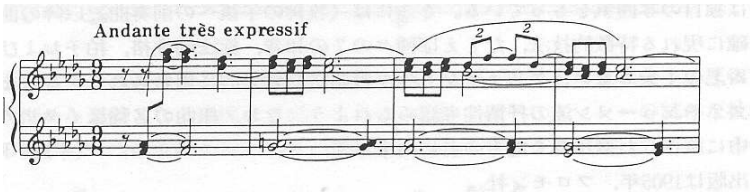

図 16　Claude Debussy クロード・ドビュッシー　*Clair de lune*　「月の光」

月は、増永玲未さんが提案してくれた、ベートーヴェンのピアノソナタ「月光」とドビュッシー「月の光」との対比となった。ミステリアスなベートーヴェンと透明な感覚のドビュッシーが、今回のコンサートの全般の山場であろう。もっとも有名な曲であるが、この美しいメロディーが月の光を暗示している。和音の反復といい、アルペジオといい、月の光のきらめきを色彩豊かに描写している。

2－4　プログラムの決定

この時点で、プログラム「花鳥風月」は以下のように決定したといってよいだろう。

花　Fleurs

Claude Debussy　クロード・ドビュッシー

Bruyères　前奏曲集第 2 巻より「ヒース」

Maurice Ravel　モーリス・ラヴェル

Valses nobles et sentimentales　「高貴にして感傷的なワルツ――アデライドまたは花言葉」

鳥　Oiseaux

François Couperin　フランソワ・クープラン

Le Rossignol-en-amour「恋の夜鳴き鶯」

Olivier Messiaen　オリヴィエ・メシアン

Le Courlis cendré「ダイシャクシギ」

image Jean-Yves Cousseau

風　Vent

Claude Debussy　クロード・ドビュッシー

Ce qu'a vu le vent d'ouest　前奏曲集第 1 巻　「西風が見たもの」

映像　小潟昭夫

月　Lune

Beethoven　ベートーヴェン

Sonate pour piano, en do dièse op.27n 2, '*Clair de Lune*'　ピアノ・ソナタ第 14 番　嬰ハ短調　「月光」第 1 楽章

Claude Debussy　クロード・ドビュッシー

Clair de lune「月の光」

（----------　休憩　----------）

Maurice Ravel　モーリス・ラヴェル
Récitation d’*Ondine* de La Nuit de Gaspard d’Aloysius Bertrand
朗読　「オンディーヌ」アロイジウス・ベルトラン
　　「ガスパールの夜」よりエマニュエル・ボダン
Ondine de Gaspard de la nuit d’Aloysius Bertrand

Jacques Rouvier　ジャック・ルヴィエ
petit scherzo chinois「中国風小スケルツォ」

François Couperin　フランソワ・クープラン
le Carillon de Cythère　「キテラ島の鐘」
Watteau「シテール島への船出」　画像

Claude Debussy クロード・ドビュッシー
Isles joyeuses「喜びの島」

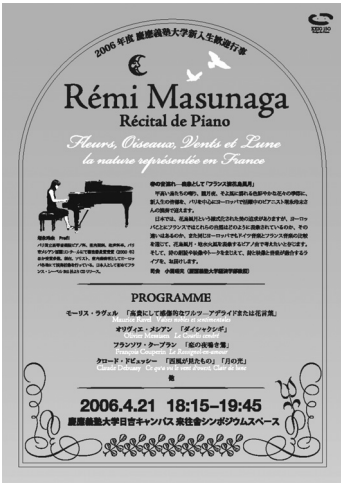

図 17 「春の音連れ」のポスター

全体の構想が出来上がったところで、ＳＦＣの大学院政策・メディア研究科でデザインを勉強している堀太誌君にポスター制作を依頼した。彼は、「映画と音楽」のポスターも手がけてくれた。大学で、何もノウハウのないところで、それなりのレベルのポスターを作ってくれてありがたいと感謝する次第である。

あとは、当日のプログラムの解説の作成が残されている。ドビュッシー、フランソワ・クープラン、ラヴェル、メシアンなど、作曲家の生涯と曲の解説である。様々な書物を読み、インターネット情報

に接していたので、むしろどれを切り捨てるかが悩みの種であった。私は、自分が強く感じた作曲家の人となりを伝えようと心がけた。

2－5　作曲家についての解説

クロード・ドビュッシー（Claude Debussy, 1862 年 8 月 22 日－1918 年 3 月 25 日）はフランスの印象派作曲家といわれている。パリ郊外のサン・ジェルマン＝アン＝レーに生まれた。パリ音楽院に 1872 年から 1884 年まで在籍し、ギローに学んだ。1884 年にローマ大賞を受賞して、イタリアのローマで、1885 年から 1887 年の間、勉学に励んだ。が、あまりイタリアの雰囲気には馴染めず、早めにパリにもどった。マラルメの火曜会に出席、ピエール・ルイスと親しくした。1889 年パリで開かれた万国博覧会でのガムラン音楽を聴いたことが、彼の音楽に大きな影響を与えた。1887 年のころ、カミーユ・クローデルは、ロダン＝ローズとの三角関係に疲れて、仕事にも行き詰っていたが、30 歳に満たない若くて、繊細で、みずみずしい感受性のドビュッシーに惹かれたようだ。ロダンの弟子であることから脱皮して、独自の表現方法を模索していたカミーユにとって、別のジャンルのアーチスト・ドビュッシーとの交友は、新しい刺激をもたらしてくれるものだったのだろう。

図 18　カミーユ・クローデル

実は、このころ、ドビュッシーは、カミーユ・クローデルと出会い、いっしょに万博に出かけて葛飾北斎の浮世絵に魅せられたらしい。ドビュッシーはカミーユに惹かれ、恋に落ちたが、理由なく、突然彼女に振られた。カミーユは、師匠のオーギュスト・ロダンの子を身ごもったのだった。後に友人のゴデにあてた手紙の中で、「以前にお話ししたあの恋愛の、残念ながら予期はしていた終焉。喧嘩や

ら、決して言うべきではなかった言葉の応酬の果ての、ありきたりの恋の終わり……彼女の唇からあんなにもつれない言葉が降ってきたその瞬間に、狂った音階が、私の内で歌っていた音階とぶつかり、私を引き裂き、何がなんだかほとんど理解できませんでした。私は彼女を本当に愛していました。そして身振りや表情からはっきり，彼女が決して魂をそっくりゆだねてくれないだろうということを、また彼女の硬い心の扉をたたいても、決してひらいてくれないことを感じていただけに、なおいっそう、私は悲しい情熱で彼女を愛したのです。でもいったい、本当に彼女は私がもとめていたものすべてをもっていたのでしょうか！　それは無だったのではないでしょうか！　いずれにせよ、私は「夢のまた夢」の消失に涙しています」 ドビュッシーは死ぬまで自分の部屋にカミーユの作品「クロト」と「ワルツ」を飾っていた。

初期の歌曲「ボードレールの 5 つの詩」（1889 年）まではワーグナーの影響を見ることができた。しかしヴェルレーヌと出会って以降の歌曲、「忘れられた小唄」、「雅やかな宴」などでは明確に、より気まぐれな形式へと変化していった。「牧神の午後への前奏曲」（1894 年）、メーテルリンク作のオペラ「ペレアスとメリザンド」（1893 年頃着手し、完成は 1902 年）など同時代の作品から現れた全音音階の使用は、その後の独特のハーモニーの基盤ともなっている。また、これらの作品はリズムの流動の先駆けでもあり、それまでの西洋音楽とは異色ともいえるものだった。私生活では、ギャビーとの同棲のあと、1899 年、リリー・テクシエと正式に結婚したが、1903 年には、エマ・バルダック夫人と愛し合うようになった。リリーは、自殺未遂をおこした。1904 年にピアノ曲「喜びの島」が作曲された。これは 18 世紀の画家ヴァットーの「シテール島の船出」からインスピレーションを受けた作品である。エマ・バルダック夫人との恋の喜びに溢れた、エロス的な

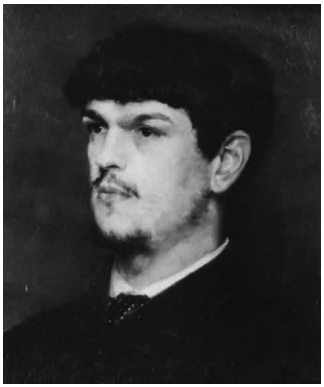

図 19　クロード・ドビュッシー

作品といえよう。また傑作「海」の完成と、エマとの間に生まれた子、クロード＝エマ（愛称シュシュ）にささえられて、ピアノ曲集「映像」第1集、「映画と音楽」と「春の音連れ――表象として」のコンサートで増永玲未が弾いた「前奏曲集」第1巻など、円熟期を迎えた。しかしながら、第一次世界大戦が始まった1914年ころ、病魔が襲い、1918年に直腸癌で亡くなった。

「春の音連れ」コンサートでは、花鳥風月の最初の曲にふさわしく、のどかな感じのする「ヒース」*Bruyères*「前奏曲集2巻」から始まった。

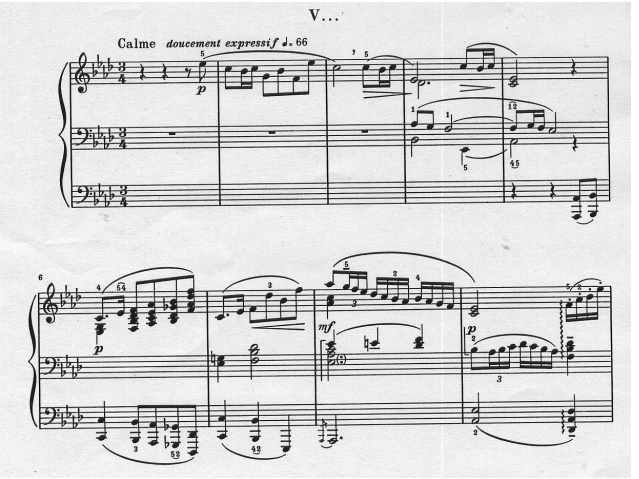

図20　クロード・ドビュッシー　*Bruyères*

そして、モーリス・ラヴェルの「高貴で感傷的な円舞曲」*Valses nobles et sentimentales*（1911年）へと展開する。ラヴェルは、12年に管弦楽曲に編曲した。バレー「アデライド、または花言葉」の慷慨は、美女アデライドの誕生日、客間で舞踏会が始まった（第1曲）　ところに、彼女を慕うメランコリックな青年ロレダンが登場し、花にたくした花言葉で愛を訴える（第2曲）。雛菊の花びらをむしるアデライドの愛の占いに、意気消沈するロレダン（第3曲）。和解して二人が踊っているところに富豪の公爵があらわれ、

それに気づいてアデライドは踊りをやめる（第4曲）。女の心を富で引こうとする公爵（第5曲）。絶望しながらも追いすがるロレダンを、アデライドは婀娜っぽく押し返す（第6曲）。しかし公爵がせがむのを断って、彼女はロレダンと最後の円舞曲を踊る（第7曲）。客たちが帰り、公爵も未練気に出てゆき、ロレダンも花で示すアデライドの慰めを拒んでいったん出たものの、戻ってきて彼女の足元に身を投げかけ、ピストルを自分のこめかみに近づける。アデライドは微笑んで、赤い薔薇の花を胸からとり、それを落として、ロレダンの腕に抱かれる（第8曲〈エピローグ〉）という王政復古期の男女の恋をラヴェルは、ワルツ仕立てで、シューベルトを手本に作曲した。「この三人の主役の恋愛遊戯が、いろいろな花によって表現されるわけである。」と、マルグリット・ロンは解説している。またラヴェル自身「第七曲がもっとも特徴的だ」といっている。

モーリス・ラヴェル Maurice Ravel（1875–1937）は、色彩的なオーケストレーションでよく知られたフランスの作曲家。フランスとスペインとの国境近く、バスク地方のシブーに生まれ、彼の母親はバスク人。彼の父親ジョーゼフはスイスの発明家兼財界人。パリ音楽院でガブリエル・フォーレに師事した。彼の曲を専門的に弾くピアニストはマルグリット・ロンや彼女の弟子のサンソン・フランソワなどがいるが、いちばん有名なのはヴラド・ペルルミュテールである。「オーケストレーションの天才」「管弦楽の魔術師」「スイスの時計職人」（ストラヴィンスキー談）とも言われるほど、精緻な音楽手法で知られている。また、スペインやアメリカのジャズなどを取り入れた曲を書いている。しかし、ローマ大賞には縁がなく、5回挑戦して5回とも落選した。この落選は、当時かなりの物議を醸し、当時のパリ音楽院の院長であるデュポアが辞

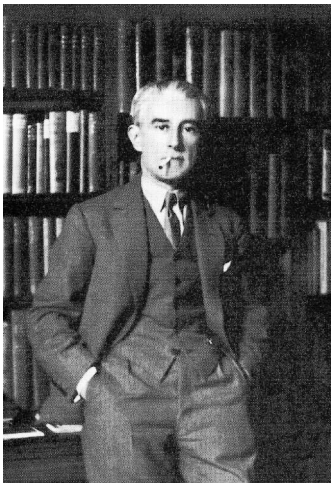

図21　モーリス・ラヴェル

任することにもなった。ラヴェルの作風は最初ドビュッシーの印象主義に傾倒していた。が、次第に古典的な音使いに変化し、ドビュッシーとは一線を画した。しかし、印象派に属する作曲家としては疑いも無く、ラヴェル自身もドビュッシーを尊敬し、評価し、1902 年には実際にラヴェルとドビュッシーは会っている。惚れっぽいドビュッシーに対して、男色家ラヴェルは生涯独身を貫いた。ラヴェルは皮肉屋で、理屈屋、よそよそしく、趣味は高貴な趣味の持ち主であった。モンフォールラモリ村のラヴェルの家を見れば、その繊細さ、その気品の高さに驚かされる。1932 年、パリでタクシーに乗っている時、交通事故に遭い、記憶障害や文字を書くことができないなどの後遺症が残った。手術を受けたものの回復することなく、1937 年 12 月 28 日に 62 歳で亡くなった。

「恋の夜鳴き鶯」と「キテラ島の鐘」のクープランは、もともとチェンバロすなわちクラヴサンの音楽家であるが、きわめてフランス的な作曲家といえよう。

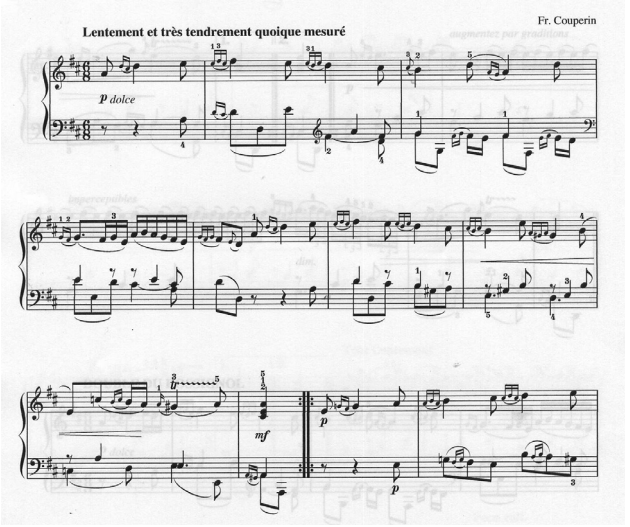

図 22　*Le Rossignol-en-amour*　「恋の夜鳴き鶯」

フランソワ・クープラン François Couperin（1668–1733）は、フランス・バロック中期から後期を代表する音楽家で、「フランスのバッハ」とも言われ、代々続く音楽一家の出身で、サン・ジェルヴェ聖堂のオルガン奏者として活動しながら、クラヴサン（チェンバロ）などのための小品を数多く発表した。25 歳のとき、ルイ 14 世に見出され、ヴェルサイユ宮廷に迎えられた。鍵盤音楽の詩人であり、音を使った細密画家として、全部で 4 巻からなる《クラヴサン曲集》（1713–1730）は、鍵盤音楽史上に燦然と輝いている。各オルドル（組曲）は自然描写や肖像が集められ、対比的な性格の曲を並べて全体の統一がはかられている。曲にタイトルがつけられている。オリヴィエ・ボーモン演奏のＣＤを散見すると、「波」「目覚まし時計」「お気に入り（愛妾）」「神秘的な障壁」「偉大にして古き吟遊詩人の年代記」「翻る飾りリボン」「恋の夜鳴き鶯」「葦」「坊さんたちと尼さんたち」「修道女モニク」「ねんね別名ゆりかごのの愛」「小さな風車」「パントマイム」「編み物をする女たち」「アルルカンヌ」といった具合に、宮廷人や狩人、犬の鳴き声や鳥のさえずり、自然の花や昆虫、教会の鐘など、当時の宮廷生活や庶民生活の雰囲気を、時には愛らしく、時にはユーモラスに、さらには風刺を効かせて、描写している。繊細でさりげなくて、繰り返し聴くうちに、いつのまにか心が捕らえられて離れがたくなる、そんな魅力がクープランの音楽にはあるだろう。

「恋の夜鳴き鶯」は、のどかな牧歌的な雰囲気の中で鳥の鳴き声がトリルで表現されている。18 世紀の典雅な宮廷生活の中から生まれた音楽といえようか？　同じ鳥の表象も、20 世紀になると、より即物的にリアリスティックな様相を帯びる。しかし、面白いことに、クープランもメシアンもオルガン奏者であるという共通項があった。

オリヴィエ・メシアン Olivier Messiaen（1908–1992）は 20 世紀のフランスを代表する作曲家でオルガン奏者である。フランス南部のアヴィニョンで生まれ、8 歳の頃からひとりでピアノと作曲の勉強を始め、11 歳でパリ音楽院に入学。1930 年頃からはインドやギリシアのリズム、音と色彩の関係、鳥の鳴き声などの探求を始める。1931 年、パリのサン・トリニテ教会のオ

ルガニストとなり、多くの宗教音楽を作曲した。第2次大戦中にはドイツ軍の捕虜となり、「世の終りのための四重奏曲」を作る。1942年にパリに戻り、パリ音楽院の教授となり、生徒としてピエール・ブーレーズ、シュトックハウゼンなどがいた。著作も多く、「わが音楽語法」は有名。その後、前衛の時代に入っても独自の音楽理論を探求し続けた。電子楽器、オンド・マルトノを使用した「トゥランガリーラ交響曲」は、その壮大さに胸を打つ。小澤征爾指揮パリ管弦楽団演奏の「トゥランガリーラ交響曲」は、私にとって忘れられない一夜だった。再婚したピアニスト、イヴォンヌ・ロリオのために書かれた作品が多く、中でもピアノ曲「音価と強度のモード」は、戦後の現代音楽の出発点となったトータル・セリー（総音列技法）の理論を最初に提示した曲として重要である。鳥の鳴き声に基づく作品としては、全2時間にも及ぶ長大なピアノ曲集「鳥のカタログ（鳥類譜）」、フランス以外の世界各地の鳥の声を採用したピアノ協奏曲「異国の鳥たち」など多数。大の日本好きで、新婚旅行は日本だったという。軽井沢では鳥の鳴き声の採集に余念がなかった。朝早く起きて、カフェオレと五線紙とマイクをもって、森に出かけては、鳥の鳴き声を採集する鳥類学者であった。また宗教的な作品として、ピアノ曲「幼な子イエスに注ぐ20のまなざし」、オルガン曲「聖三位一体の神秘についての瞑想」、管弦楽曲「我らの主・イエスキリストの変容」など、そしてオペラ「アッシジの聖フランチェスコ」などがある。日本人武満徹などの初期の作曲活動に多大な影響を与えている。

2-6　ヴァットー「シテール島の船出」からドビュッシー「喜びの島」へ

2-6-1　「シテール島への船出」

アントワヌ・ヴァットー「シテール島への船出」（1717）は、パリ・ルーヴル版とベルリン版がある。ルーヴル版は、もともと「シテール島の巡礼」と書かれていた。巡礼たちがこれから船に乗って旅立つのではなく、すでにシテール島にいて、このヴィーナスの島に名残を惜しみつつ、船に乗って帰るところの情景らしい。そう言われてみれば、右端にヴィーナス像があって、そのまわりにキューピットが飛び回っており、男女のカップルたちも愛の交

図 23　パリ・ルーブル版

図 24　ベルリン版

換に余念がない。愛の女神ヴィーナスが流れ着いた島に行こうとする巡礼風俗をあらわしている。

ルーヴル版は、ヴィーナスの半身像と８組の男女と定かならぬ船と海の光景が幻想的であるが、ベルリン版は、ヴィーナスが完成像になっており、カップルの数もより多く、明確な筆致で描かれ、より現実的といえる。

右手の樹齢数百年の老木の下で、ヴィーナスの胸像柱のそばに、大理石質のベンチに座っているとってもエレガントな若い女性が、ひざまずいてささやく男の言葉に耳を傾けている。彼はシテール島巡礼者だ。彼女はためらいつつ、興味深く扇子の模様を眺めているように見える。右下にもう一人の恋人がスカートを引っ張って彼女を誘っている。

左手のカップルでは、女性が、騎士が起き上がるよう差し伸べた手を受けている。さらに奥には、巡礼者が女の腰に手を回し、連れて行こうとしている。彼女は後ろを振り返って、仲間の遅れに戸惑っているが、促されるがままになっている。今、恋人たちは砂浜のほうに降りて、仲睦まじく笑いながら船のほうに向かっている。左端では、巡礼者たちが、恋人たちを、水の上で黄金幻想に揺れている船の中に導こうとしている。相互の情熱を示すためかのように、若い男は我慢できずに女の腰に手を回し、船に乗せようとしているが、女も執拗に騎士を見つめ、彼に手を差しのべている。オールに寄りかかっていた二人の船頭がそれを使う準備をしている。飛び回る愛のキューピットたちは、水平線から現れる紺碧の島へ旅人たちを案内しているが、誰も船に乗っていない。

要するに、様々なカップルは、中世画に見られるように、恋愛の心理的な過程で次々に起きる場面を構成しているわけだ。しかし、公園の胸像や大理石のベンチなど貴族的なもの、岩の上の小さい村など田舎風なもの、銀色に反射する海、遙か遠く夢のような山々など、様々な要素が、織り混ぜられている。愛における説得・同意・完全な和合という３段階を表現している。愛のキューピットたちがもつ矢や松明は、情熱の火を象徴している。赤い絹の天蓋がついたベッドの形をした船や、貝殻に包まれた人魚（女性的な誘惑の象徴）とサチュロス（男性的な血気の紋章）の形をした船尾など、恋愛の力

強さを表象していると思われるが、その中でも無限の悲しさを漂わせている。ヴァットー「シテール島への船出」パリ・ルーヴル版（1717）は、ヴィーナスの腕がもがれているが、「シテール島への船出」ベルリン版（1718 頃）は、腕が付いている。前者が、幻想的であるのに対して、後者はより現実的に描かれている。フランソワ・クープラン「キテラ島の鐘」（1723）、このクラブサンの曲は、いずれにせよ、ヴァットーの絵にインスピレーションを受けて作曲したものではないか。

19 世紀のロマン主義の時代になって、この絵の持つ憂愁さに呼応するかのように、詩人ジェラール・ド・ネルヴァルは、『東方紀行』（1851）の中で、シテール島へ向かう船の中から、三本の木でできた絞首台が見えたことを記していた。すでに、ジェラール・ド・ネルヴァル「東方紀行」（「芸術家」誌 1844 ～ 45）のなかで、シテール島でのウエヌス信仰「二人の恋人、ポリフィルとポリアがシテール巡礼を準備している」と書き、「サン＝ニコロの港に停泊するに先立って岸間じかに船が進みつつあったとき、私の見かけたのは、空の紺碧の上にぼんやり浮き出た小さな記念建造物、岩の上に何かしら鎮守の神の今なお立つ姿かと思われるものだった……だが更に近づいてわれわれは、この海岸に旅人たちの注意をひきつけるこの物体を、明確に見分けることができた。それは絞首台、三つの枝の絞首台で、枝の一本にだけ人が吊るされているのだった。さりながら私の初めて見た現実の絞首台というのが、英国領なるシテールの地でこれを見かけるめぐり合わせになろうとは！」（XV 章サン＝ニコロ）を記していた。

シャルル・ボードレールは、この文章に触発されて、「シテールへの旅」Voyage à Cythère 1851-1852 という詩を歌った。かつては黄金郷であったシテール島は、いまや絞首台にぶら下がった死体が鳥たちに食いちぎられている、そんな悲惨な図柄を自己の内面に照らし出して歌っている。

――きみは甘やかな秘めごとの島、心浮き立つ歓楽の島なのだ！
きみの苦しみは私の苦しみだ、滑稽な絞首刑者よ！
おお、美女神（ウエヌス）よ！きみの島の中で、たっているのを私が見たの

は、私の映像が吊るされている象徴的な一基の絞首台だけだった……

ボードレール『悪の華』より

ヴィクトル・ユゴーは、ボードレールの詩に対抗して、当時の呼び名であった「セリゴ島」という詩の中で、確かにかつての愛欲の島はいま廃屋の島となってしまったが、空を見上げればヴィーナス（明けの明星）が光り輝いているではないかと、訴えている。

年老いた人は、誰しも孤独で、悲しげな、
こんな岩場、セリゴ島のようだ。これがかつてはシテール島だった。
岩山よ、きみはあの鳥をどうしたのだ、ばらの花たちをどうしたのだ？
そうだ、死ぬがいい、快楽は。だが生きてほしい、愛は！
地上はセリゴをもつが、天上は金星（ヴィーナス）をもつのだ。

1855 年 6 月ユゴー「セリゴ島」（『静観詩集』より）

絵画から詩そして音楽へ、メディアの移行とともに、シテール島伝説は増幅されてゆく。

ドビュッシーは、ルーヴル版にインスピレーションを受けたようで、「喜びの島」の中で、船出や航海のイメージを音で表現している。

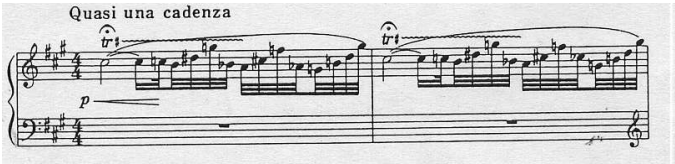

図 25　クロード・ドビュッシー　*Isles joyeuses*

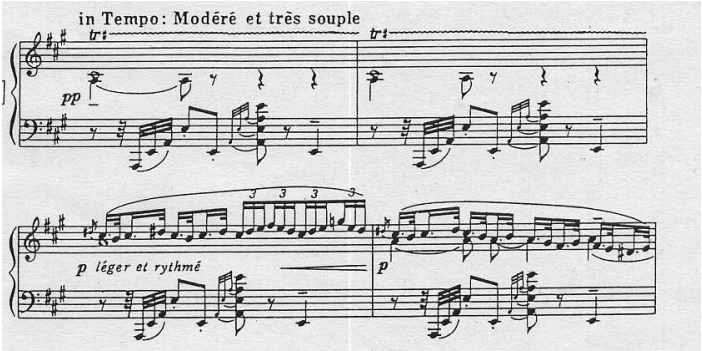

図 26　クロード・ドビュッシー　*Isles joyeuses*「喜びの島」

「生まれる前の静けさと死の静けさとの間で、初めと終わりの真ん中で、まわりを非在という海に取り囲まれた響きわたる島のように音楽が浮かび上がってくる。〈喜びの島〉は、その歌といい、その踊りといい、ドビュッシーのものでしかありえなかった。……このオアシスは、砂漠という永遠の沈黙の中で、笑い声や詩や歌のある人間的なオアシスとなるだろう。ここではオアシスは世界そのもの、無限の天空という闇に取り巻かれた生きた自然と芸術の場である。」と、哲学者ヴラジミール・ジャンケレヴィッチは『ドビュッシー生と死の音楽』（船山・松橋訳）の中で述べている。

2－7　演奏者と聴衆との触れ合い

こうして、「春の音連れ――表象として　フランス流花鳥風月」のプログラムが決まり、あとは開場のセッティングをどのようにするか、だけであった。今回は、シンポジウムスペースという小さな会場だったので、ピアノを囲むようにして、映像を 3 箇所から流すことにした。演奏終了後は、フランス語合同研究室の萩村恭子さんのご好意によりささやかなカクテルパーティーを行い、演奏者と聴衆がともに語り合う機会を設けた。

演奏会場も工夫して、長方形のところにピアノを置き、それを取り囲むようにして、座席が並び、さながらオーケストラ・ボックスのように、客

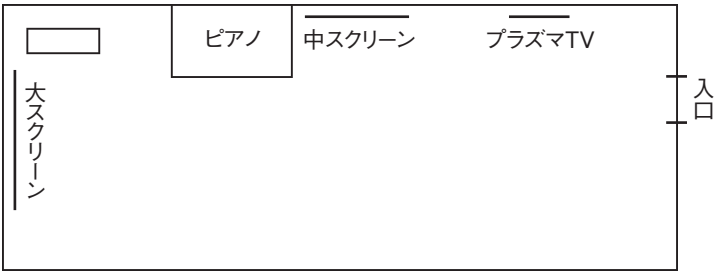

図 27　演奏会場シンポジウム・スペースの配置

席の椅子が並ぶ。スクリーン左正面に 200 インチ、ピアノの脇に 100 インチ、そして後方に 48 インチのプラズマテレビが置かれて、映像が放映された。なので、演奏者と客が身近に感じられ、アットホームな演奏会を演出できた。演奏終了後、会場の半分ににわかテーブルをつくり、簡単なおつまみやバゲットパンにチーズやサラミをのせて、バローロやボジョレ・ヌーボーなどワインとノルマンディー産のシードルとお茶と水を並べて、カクテルパーティーをやり、演奏者と観客の親睦と交流を図った。旧交を温めたり、新しい出会いがあったり、思わぬ話も聞けた。このアイディアは、演奏者の増永玲未さんも大変喜び、楽しいひと時となった。Remi のファンのアメリカ人エリックも来ていたし、通信教育の卒業生がたくさん来ていた。新入生歓迎行事なのだが、彼らはあまり来ていなかった。しかし、わずかの新入生達のなかには、ピアノクラブの学生もいて、その年の三田祭でジャック・ルヴィエの『中国風スケルツオ』を弾くことになった。私の学生「研究プロジェクト」の映像製作者達が全面的に動いてくれたので、会場セッティングも片付けもスムーズに行った。

2－8　花鳥風月の感想

・日本流花鳥風月と変わらないと思いました。

・花、風、月はとても心地よかったり、聞きやすかった。鳥はこのような表現の仕方もあるのかなと勉強になった。

・テーマがハッキリとしていてイメージしながら聞くことができた。

・普段聴くのと違った音楽の聴き方ができました。
・映画と音楽、テレビとは違う新しい感覚でした。
・Great!!! Fantastic!!! Wonderful program! CLAP CLAP
・この季節にとてもふさわしくすばらしい内容だと思います。プログラムもとてもよくできていて、無料でいただけるのは感激です。
・プログラムが毎回とてもテーマにあった音楽で、美しくすてきでした。（30代女性塾員）
・この春という季節にぴったりですね。私は、LUNE が心地よく楽しみました。
・フランスの文化にふれられてうれしく思いました。
・演奏する曲目や詩とのカラーコーディネート、小道具（？）等すべて計算され、配慮の行き届いた、興味深いイベントだったと感じました。新入生歓迎コンサートにしては、暗く悲しいテーマも含まれていましたね。次回は、もっと明るくポジティブなコンサートをお願いします。
・プログラム構成が面白いと思いました。これがひとつの芸術といえるのではないでしょうか。鳥も春らしいメロディーでしたが、月ではベートーヴェンとドビュッシー、まことに対照的でした。
・詩の朗読は、かわいい声の音響をもう少し考えていただくとよかったと思います。
・ずいぶん前からの入念な準備で、素晴らしい企画をありがとうございました。
・とてもすばらしかったです。解説していただいたこともよかったです。
・大変よかった。こんなにたくさんの曲とテーマにそった曲が聞けてよかったです。
・朗読があって非常によかった。新鮮でした。
・今回は詩の朗読などがあってとてもよかった。
・詩の朗読素敵でした。映像も素敵でした。
・ラヴェルのワルツ。「花」の説明がほしかった。「西風の見たもの」映像の結びつきに安易な印象を受けた。（申し訳ありません）結びつきにもっと深いものを掘り下げてほしい。コラボレーションをやる以上は。

・とても面白い試みでした。楽しませていただきました、「花」の曲が少ないとは、とても驚きました。（フランスで）ほかの国では多くあるのでは。ロシア、イタリア、ドイツ、歌曲など多くあるように思います。
・普通のピアノ演奏は流れだけで終わってしまいますが、本日は解説付きで、本当によくわかり、感動しました。レベルは違いますが、私は、子供に曲を聞かせ、絵を描かせていましたので、ひとつひとつの曲がとても感動的でした。この企画本当にありがとうございました。軽い感じで、重さがあり、スピード感、今の季節にあっている感じがしました、中国風の曲、いいですね、ミ、ド、ラ説明してくださいましたので、より楽しめました。朗読曲の解説よかったです。
・やはりクープランの鳥は何回聴いてもいいです。月は、ベートーヴェンの風貌から考えられないような繊細さ、物静かで、物思いにちょうどよく音楽に引き込まれる、ドビュッシーのものは心になにかふあっとしたものが湧き出てこころよい音楽に包まれてストレスが解消する。残念ながらラヴェルの花はわかりませんでした。全体としてとてもよく、小潟先生の水と風の映像は大変よかったと思います。
・無理に「花鳥風月」にしなくて、フランスの春の曲だけでもうれしいです。小さなコンサート楽しいです。
・フランスの文化の 1 部が感じられて先生のご説明もわかりやすくよかったです。朗読も大変よかったです。
・ピアノで各々を表現できる素晴らしさ。説明があり分かりやすかった。ベートーヴェンの月光の曲 15 年前コーラスで歌いました。懐かしく思い出しながら聞きました。月の光も好きになりました。ありがとうございました。
・演奏と映像が同時に行われ、こんな素晴らしい思いをさせていただき、感謝いたします。花鳥風月それぞれの情景が目に浮かんでしまいました。贅沢な時を過ごさせていただきました。フランス語の朗読までも聴けるとは、やはりフランス語は美しい。
・音楽も映像も楽しませてくださいました。テーマごとにいろいろ楽しませていただきありがとうございました。

・認知科学を思わせます。夢想家天満敦子と共演したら？（柔らかな手）ミドラが最も面白いです。

・映像とピアノ演奏を聞けて、とてもすばらしかったです。そしてお話を聞けることによって、より明らかな場面となさってくださいました。感動いたしました。私がベートーヴェンの「月光」とドビュッシー「月の光」を弾くときには、色を旋律の中に感じながら弾くのですが、映像とすばらしい演奏は、もっとダイナミックに繊細さが刻み込まれていました。映像でピアノを弾かれている手の部分をよく拝見できたので、よかったです。すばらしい動きで勉強になりました。詩を読まれたのも美しくすてきでした。

2－8　ピアニスト増永玲未さんへのエール

・ 素晴らしいピアノ演奏をどうもありがとうございました。

・「中国風小スケルツォ」がかなり印象的で、あのまさに中国風のフレーズが頭から離れません。

・音色自体が語りかけてくるようでとてもゆったりできました。これからも心からの演奏を続けてください。

・素敵な演奏をありがとうございました。これからもいろいろな試みを続けてください。

・今日、初めてプロの方のドビュッシーの曲の演奏を聞きました。私はドビュッシーの曲が大好きで、ベルガマスク組曲やピアノのためになど、弾きました。今日はとてもよい経験をさせてもらいました。ありがとうございました。

・You are wonderful! I really enjoyed the Clair de Lune piece.

・今後もこの調子でがんばってください。さらに内容を工夫されることを期待します。幻想的な音色に酔いしれます。今日は思い出に残る春の夜になりました。普段はパリにいらっしゃるとのこと、今夜はここ日吉でお聞きできて幸せでした。ありがとうございました。とてもあたたかいコンサートでした。

・毎日、玲未さんのＣＤ聴いています。私の一番のお気に入りになっていま

す。今日の「月の光」「夢」最高でした。♡

・優しいお人柄が曲に表れていました。素晴らしい演奏をありがとうございました。

・いつも素敵な音楽をありがとうございます。

・素晴らしい演奏をありがとうございました。昨年夏のコンサートを聴かせていただきました。子供時代にはベートーヴェンのソナタをよく弾いたものですが、13 歳頃ピアノのお稽古はやめてしまいました。今は聞くだけですが、ドビュッシーは好きです。お話しすることができず残念でしたが、またドビュッシーや、玲未さんのお勧めの作曲家の作品をたくさん聴かせてください。それと笑顔を撮らせてくださいね。

・玲未さんのピアノ演奏は今回が 2 度目です。日本での演奏の機会を増やしてください。そしてヨーロッパの風を運んでください。期待しています。

・やはり Debussy がお得意と拝察します。演奏のほうは言うに及ばず、talk も語尾がはっきり聞き取れる話し方は、普段フランス語を話されているかと、ちょいと思いました。（日本人は語尾が聴きにくい話し方をしてしまいますから、）フランスの mineur な音楽も今後紹介していってください。また、逆に日本のよい音楽をフランスに紹介して日仏の音楽の架け橋として今後ともご活躍ください。

・どうぞがんばってください。素晴らしかったですぅ！！

・中国風スケルツォ、ステキでした、ドビュッシー「喜びの島」すばらしかったです。ドレス、いつも楽しみにしています。

・メシアンがとてもよかったです。ご精進をお祈りいたします、

・すばらしい演奏をありがとうございました。花鳥風月に酔いしれました。本当に鳥の声が聞こえてきました。ますますのご活躍を！

・すばらしい演奏ありがとうございました。感動しました。増永さんのますますのご活躍をお祈りいたします。来年も日本で主な割れれば、友人をお連れしたいと思っています。

・曲に対してしっかりと読み取り、歌っているように感じました。タッチのよさ、鳥の曲など、指先も鳥といっしょに飛んでいるかんじでした。ドビ

ュッシーの曲、両手メロディーがあり、うごきはやく、でもしっかりと弾いていらっしゃいます。

・増永さんの音楽を聴くと、とても心が喜びます。そんな感性を持っている増永さん、多くの人々に幸せを与えていると思います。これからもコンサートを続けてください。本日は大変ありがとうございました。

・素敵な音、話し方、大切にしてください。

・素晴らしい演奏で、フランスで日本人が活躍されていらっしゃるのに感動いたしました。どうぞいつまでもご活躍を。

・大変感動させられました。お身体を大切にされ、日本人の誇りをもってがんばってほしい。

・素晴らしい演奏うっとりとして聴かせて頂きました。お美しくお若い増永様のますますの活躍を心より祈念致しております。

・素晴らしい演奏をありがとうございました。風の力強さや、月光のやさしさ等、大変楽しく拝聴させて頂き、ありがとうございました。

・月光の下でそぞろ恋心。もっとも日本的ですね。世界がこのようになればよいですね。

・ピアノタッチがよい。

・パリの教会で、お目にかかれる日を楽しみにしております。ピアノは生が一番ですね。

・これからも多くの方を感動させる演奏を続けてください。希望、感動、病める者にとっては一日も長く生き延びることができ、心の中に美を見い出して行けることと思います、

その後、2006年9月に、私は、パリの聖エフレム教会を再訪して、増永玲未さんのライブコンサートを録音させていただいたり、2007年にはパフォーマンスとして湘南の海で踊る石本華江の映像に、あるいはフランス文化の源流を訪ねてという作家や画家や作曲家の生まれた生家や活動拠点を撮った映像に、バックグランドミュージックとして増永玲未さんのライブ演奏におけるショパンやドビュッシーやフィリップ・グラスの曲を使わせていただ

いているように、ずうっと私の心の支えとして彼女の演奏は響いているのである。

参考文献

青柳いづみこ『音楽と文学の対位法』みすず書房、2006
作曲家別・名曲解説ライブラリー④「ショパン」音楽之友社、1993
作曲家別・名曲解説ライブラリー⑩「ドビュッシー」音楽之友社、1993
作曲家別・名曲解説ライブラリー⑪「ラヴェル」音楽之友社、1993
多田道太郎編『シャルル・ボードレール・悪の花・注釈（下）』、京都大学人文科学研究所、1986
別宮貞雄『ドビュッシー前奏曲集第1巻全曲研究』芸術現代社、2005
松前紀男『クープラン　その家系と芸術』音楽之友社、1997
湯原かの子『カミーユ・クローデル――極限の愛を生きて』朝日新聞社、1988
フジ子・ヘミング『フジ子・ヘミングの「魂のことば」』清流出版、2002
アンヌ・デルベ／渡辺守章訳『カミーユ・クローデル』文藝春秋、1989
ヴラディミール・ジャンケレヴィッチ／船山・松橋訳『ドビュッシー　生と死の音楽』青土社、1987
ヴラディミール・ジャンケレヴィッチ／福田達夫訳『ラヴェル』白水社、2002
オリヴィエ・メシアン／クロード・サミュエル・戸田邦雄訳『オリヴィエ・メシアンその音楽的宇宙；クロード・サミュエルとの新たな対話』音楽之友社、1993
フランソワ・ルシュール／笠羽映子訳『伝記クロード・ドビュッシー』音楽之友社、2003
ベンジャミン・イヴリー／石原俊訳『モーリス・ラヴェル　ある生涯』アルファベータ、2002
マニュエル・ロザンタール／マルセル・マルナ『ラヴェル――その素顔と音楽論』春秋社、1998

マルグリット・デュラス／清水徹訳『愛人／ラマン』河出書房新社、1985
マルグリット・デュラス／ドミニク・ノゲーズ／岡村民夫訳『デュラス、映画を語る』みすず書房、2003
M. デュラス『モデラート・カンタービレ』河出文庫、昭和 60 年
マルグリット・ロン著／ピエール・ロモニエ編・北原道彦・藤村久美子訳『ラヴェル――回想のピアノ』音楽之友社、1985
M. ロン／室淳介訳『ドビュッシーとピアノ曲』音楽之友社、2005
R・ハーウッド／富永和子訳『戦場のピアニスト』新潮文庫、2002
ロジャー・ニコルス／渋谷和邦訳『ラヴェル　生涯と作品』泰流社、1987
Pierre Rosenberg : Tout l'œuvre peint de Watteau, Flammarion, 1982

参考資料

『雨のしのび逢い』（*Moderato cantabile*）ピーター・ブルック監督、1960 年（VHS、東北新社、1998 年）
『秋のソナタ』（*The Autumn Sonata*）イングマール・ベルイマン監督、1978 年（DVD、ハピネット・ピクチャーズ、2000 年）
『愛人／ラマン』（*L'Amant*）ジャン = ジャック・アノー監督、1992 年（VHS、日本ヘラルド映画社、2006 年）
『めぐりあう時間たち』（*The hours*）スチーブン・ダルドリー監督、2002 年（DVD、アスミック、2005 年）音楽フィリップ・グラス
『リリイ・シュシュのすべて』岩井俊二監督、2001 年（DVD、ノーマンズ・ノーズ、2002 年）
『戦場のピアニスト』（*The Pianist*）ロマン・ポランスキー監督、2002 年（DVD、アミューズソフトエンタテインメント、2003 年）
Remi Masunaga : Claude Debussy piano, Stil, 2003
Samson François : Ravel L'œuvre pour piano seul ;EMI CLASSICS ;1967
François Chaplin, Remi Masunaga,
Cécile Hugonnard-Roche, Dominique Merlet : La Magie de Piano, Bayard Musique, 2007

Olivier Baumont : Couperin Works for Harpsichord, WARNER CLASSICS, 1991-4
小潟昭夫「増永玲未の世界――ピアノとトークと映像」DVD、2005
小潟昭夫「春の音連れ――表象として　フランス流花鳥風月」（演奏・増永玲未）DVD、2006